リレーエッセイ

記念品の行先

名城大学の杉山栄二先生からバトンを頂きました，豊橋技術科学大学の中神光喜と申します．杉山先生とは，日本分析化学会をはじめ，分離分析関連の学会でよくお会いしており，仲良くさせていただいております．

さて，ちょうどこのリレーエッセイのバトンを受け取った頃，研究室の学生から相談を受けました．内容は，「今度卒業する先輩に何かプレゼントをしたい，ボールペンとか…」とのことでした．確かに，インターネットで“卒業祝い”と検索すると，ボールペンを勧めているウェブサイトが多くあるのですが，何をプレゼントしたらいいのか思いつかないからと言って，安易にボールペンを選択することは，あまりオススメしません．なぜならば，我々の身の回りにあるボールペンが優秀すぎるからです．

皆様の周りにあるボールペン，特に油性ボールペンはどこのメーカーのものでしょうか．財閥みたいな名前の会社のものですか．航空操縦士みたいな名前の会社のペンでしょうか．もちろん，夕焼け小焼けの昆虫みたいな名前の会社製のペンを愛用されている方もいらっしゃるでしょう．ノベルティのボールペンも，そのほとんどが，上記の会社製ではないでしょうか．これらのボールペンに慣れた人が，海外製ボールペンを使うと，「結構高かったのに，そんなに書きやすくないような…？」との感想を抱くことがあります．もちろん，書きやすいと感じるかどうかは，その人の好みによるのですが，国産ボールペン，すなわち，低粘度油性インクに慣れた人には，従来の油性インクの書き味に違和感を覚えるのです．

恐らく，多くの方が，自身が使っているボールペンのインクまでは，意識していないと思います．実は，我々の身の回りにある油性ボールペンは，上述した会社製のものを含め，その多くには低粘度インクが採用されています．低粘度インクの特徴として，筆記抵抗が低く，また，ダマができにくいため，とめ・はね・はらいを書き分ける必要がある漢字のように，ペン先のスリップコントロールが求められる文字の筆記に適しています．そのような書きやすいインクを搭載したボールペンが100円前後で販売されているのですから，ショーケースに展示されているような高級ボールペンはさぞかし書きやすいだろう，と錯覚するのも無理はありません．

一方で，社会人なら高いペンを一本は持っておくべき，との意見もよく聞きます．いわゆる高級ボールペンは，各種パーツが金属製であることが多く，そのずっしりとした重みを使って文字を書くことができます．金属軸の採用により，高級感も感じられるでしょう．しかし，肝心の書き味が好みでないのであれば，あまり使う気にはなりません．

そこで，レフィル（替え芯）に目を向けてみてください．レフィルの形状は，“JIS S 6039:2020 油性ボールペン及びレフィル”に定められており，その形状の一つに“G2”に分類されるものがあります．G2は俗に“パーカータイプ”と呼ばれる形状で，“ISO 12757-1:2017 Ball point pens and refills — Part 1: General use”ならびに“ISO 12757-2:1998 Ball point pens and refills — Part 2: Documentary use（DOC）”においても，同様の形状が定められています．欧州を中心に広く採用されている規格であり，G2レフィルに対応したボールペンであれば，他社のレフィルに交換することが可能です．G2規格のレフィルには，低粘度油性インクである，ジェットストリーム（三菱鉛筆），QUINK Flow（PARKER），easy FLOW（SCHMIDT）などもあるため，せっかく貰ったものの，好みの書き味ではないが故に箱に入れたまましまってしまい，全く使われないという事態も減ると思います．皆様も，引出しにしまったまま使っていないボールペンがあれば，G2規格に対応していないか，一度確認してみてください．もしかしたら，皆様のお手元で活躍できるかもしれません．

そこまで面倒なことを考えたくないのであれば，ボールペンではなく，万年筆をプレゼントするというのも良いと思います．万年筆と聞くと，雪山や鳥のようなブランドをイメージするかもしれませんが，これも，国内メーカーの品質が極めて高いため，まずは国産万年筆の購入をお勧めします．万年筆特有のヌラヌラとした書き心地は，とてもボールペンから得られるものではなく，また，万年筆自体が纏（まと）う高級感にどことなく所有欲がくすぐられます．

長々と書きましたが，少しでもご参考になれば幸いです．次回のリレーエッセイは琉球大学の佐伯健太郎先生にお願いいたしました．佐伯先生のように，日常的に飛行機を使われる方は，搭乗の際に万年筆を持ち込まないようにご注意ください．一応，以前と比べてインク漏れリスクは減ったようですが，機内で万年筆とノートを広げはじめたら，インクをこぼしたりしないかと気が気でないと思います．客室乗務員と“パイロット”が．

〔豊橋技術科学大学　中神 光喜〕